その他

「筆者は…」と書くか、「私は…」と書くか

大学院総合福祉研究科教授 吉 田 章 宏

「筆者は…」と書くか、「私は…」と書くか

大学院総合福祉研究科 教 授 吉 田 章 宏

短くてもよいから寄稿を、とのお誘いに応えて、四百字原稿用紙十数枚程度の短い随想を書いてみることにする。主題には、心理臨床実践研究者の方々が、心理臨床実践や研究の報告を書くとき、自らのことを「筆者は…」と書くか、あるいは、「私は…」と書くか、という「日常的な些事」を選び、ご一緒に考えてみることにしよう、と思う。

が、この主題を選んだ途端、早速、そもそもこの文章を書くのに、「筆者は…」と書くか、「私は…」と書くか、ということが、気になりだした。もちろん、「気になりだした」のは、「筆者」である「私」である。はて、いつもはどうしていただろうか。どうも、両方を、それぞれの場合に応じて、使い分けているような気がする。では、何らかの原則に基づいての使い分けだったか。どうも何となく、であるような感じがする。いや、何となくというよりも、書いてみて、それでしっくりした気分になれるかなれないかを、その場その場合で感じ分けて、決めていたようだ。

だが、いろいろと考え始めると、こんな小さな問題が、段々と膨れ上がって、大問題になって来る感じがしてくる。これは、えらいことになった、と最初のややのんびりした気分が怪しげになってきて、慌て始める。そこで、もう一度考え直した。最初に、四百字原稿十数枚程度と決めたのだから、紙数がそこに達したときに止めればよい、と。そう覚悟を決めたら、大分気が楽になった。

さて、そこでまず手始めに、「筆者」と「私」(わたくし)それぞれの類語を、手元の「類語辞典」でちょっと調べてみた。「筆者」には、「作者、著者、書き手、編者、訳者」などが挙げられている。ところが、「わたくし」(私)には、「わたし、わたくし、あたし、あたくし、あたい、おれ(俺)、ぼく(僕)、わし、おいら、おら、あっし、こちとら、吾人、余、我が輩(吾輩、我輩、わがはい)、それがし、小生、不肖、愚生、小弟、手前、拙者、自分、自分自身、自己、己(おのれ)、自身、…」などが、挙がってい

る。まず、直ぐ気付く事は、「筆者」には、類語が少 なく、研究論文あるいは実践報告を書く場合であれ ば、余り迷わずに、自らを「筆者」と呼ぶことに、ほ とんど落着くだろう、ということだ。ところが、「わ たくし」の方は、これだけ類語があるのに、どうやっ てどれに決めるだろう、と考え始めると、これもな かなかたいへんだ。論文で、「我輩」とか「俺」とか 「僕」とか「こちとら」などと書いたら、どうなるだ ろう。恐らく、一般に、それぞれの世界で受け入れら れている慣習のようなものがあって、それに従えば無 難、ということなのではないだろうか。また、しばし ば言われているように、日常会話では、日本語の人称 代名詞は、語り手と聞き手の社会的上下関係、目上 か、同輩か、目下か、ということを、語り手がどう捉 えているか、また、相手に対して何を感じているか、 例えば、尊敬か好意か軽蔑かなどを、表現することに もなり、また、それを聞き手がどう受け取るというこ ともあり、なかなか微妙な問題だ、と思う。話し手の その場への態度、例えば、真剣で真面目か、気楽に冗 談まじりか、などを表している、と解釈されることも 避けられない。ちなみに、この類語辞典には、「わた くし」などの語の英訳が書かれているのだが、その 総てが"I"なのである。"I"を日本語に訳す場合に は、随分と慎重な配慮が必要になることだろう。(「自 分」以下の訳語は "self, oneself" となっている。) ふ と、思い出したことがある。最初の米国での学生生活 (1964-1967) で、米国社会では人称代名詞の使い分 けが簡単であることに、日本での微妙な気遣いに慣れ ていた「僕」は、その気遣いを忘れることが出来て、 何か明るい解放感を味わったことを思い出した。それ から、帰国してから取り戻さなければならなかった気 遣いの「勘」のことも…。また、思い出したのは、日 本で、会社の同僚同士が飲み屋で飲んで、話の成り行 きで、互いの呼称が、「先輩」から「あんた」へ、さ らに「おまえ」、「きさま」、「呼び捨て」へと変化した ことで大喧嘩となり、殺人事件にまで発展した事件の ことである。

こうしてみると、この「呼称」の問題には、世界共 通の側面もあるが、日本社会と日本語に固有の問題 が、どうもあるようだ。

1965年、イリノイ大学でCyberneticsのW. Ross Ashby 教授が、厳しく批判なさったことがあった。それは、論文の筆者が、執筆者を指示するのに、"We"と書くことについてであった。"We"という言葉では、誰を指しているのかが不明瞭で、論文の特定の内容あるいは論旨に、誰が責任をもつのかが曖昧になるので、いけない、というお話だった。確かに、"We"と書いて、書いていることへ読者を何時の間にか引き込んで同意を迫るとか、あるいは、あたかも同意を既に得ていることを前提としているかのようにして、書き進めるような場合がある。Ashby先生は、書き手は、自覚的に、書いた内容に責任をもたなくてはならないから、"We"が具体的に誰のことかわかるように、そして、誰の責任かがわかる様に書け、と強く言われたのだった。

しかし、「筆者」と「私(わたくし)」の間では、そのような責任のとり方に、相違は生まれないだろう。「筆者」(this author)も「わたくし」(I)も同一人物を指示することは明白だ。例えば目前のこの随想の文章の場合、どちらも、現実世界で、筆者として署名されている名の同一人物を指すことになる。ところで、「筆者」が学部学生だったころ、論文の文章を書く時は、「私は…」とは書かずに「筆者は…」と書くのだ、と教えられた覚えがある。余り深くは考えず、「学問の世界」での、私にとって不慣れな新しい慣習を学ぶようなつもりで、他の学生たちと共にそれに素直に従ったのだった。そして、その慣習が身についた後は、「私は…」と書くことには、逆に、慎重になり抵抗を覚え、そう書くときには、ある種の構えをもって書くようになった。

仮に、「私は…」と書いた論文を誰かが音読しているのを聞いたとする。すると、音読している読み手が「私」と言っているのではなく、音読されている論文の筆者が彼(彼女)自身のことを「私は」と指示して言っているのだ、と区別しながら聞くことに成る。もし、その区別が出来ない子どもが聞いたら、混乱に陥ることだろう。しかし、実は、音読している本人も、この区別をしながら、音読しているはずである。つまり、「『私(わたくし)』と音読してはいるけれど、こ

れはこの論文の筆者のことであって、いま音読してい るこの『私』のことではないのだ」と、わざわざ「意 識して」とは言わないまでも「覚知して」読むはずで ある。しかし、論文の書き手自身が、人前で音読する 場合はどうだろうか。例えば、学会の口頭発表で予め 印刷された論文要約をそのまま音読する場合がその一 つである。この場合、「発表者」において、「書き手」 と「音読者」と「私」とが、多少の時間的ずれはある にせよ、一体化するだろう。では、論文読者が、独 りで黙読する場合はどうか。書き手は「私は」と書 いているので、「わたくしは」と読むほか無い。しか し、読みながら、密かに「私にはこの論文は面白くな い」と言葉にするとき、論文中の「わたくしは」とい う言葉が邪魔になるのではないだろうか。その時は、 「俺には面白くない」とか、「あたしには…」とか、区 別して、呟くのだろうか。いや、邪魔にはならないま でも、「筆者は」と書いていてくれていたとしたなら、 「筆者」と読んでいる「私」との間の混乱は起こりに くいのに、と思ったりすることもあるのではないだろ うか。「私は」と書いてある論文を読むだけでは、「私」 である「書き手」に、つまり「筆者」に、成れるはず は決してないのだけれども…。

ところが、読むということには、読み手が「書き 手」に共感して読むか否かという微妙な契機が伴う。 さらにまた、「共感を誘う文章」と「共感を拒む文章」 との区別もある。例えば、実践記録を実践者が書いた 場合、その記録の読み手には、書き手になったつもう で「共感的理解」をもって読む、ということが求めら れる場合がある。すると、「筆者」といういかにも改 まった言葉は、書き手が「読み手」から距離を置く 事を意図しているようにも感じられて、「私」と書か れている場合と比べて、共感に誘われにくいであろ う。すくなくとも、「筆者」という言葉は、直ちに「読 者」との対比を「覚知させ」、距離を感じさせる。こ れとは対照的に、「私」という言葉は、読者自身であ る「私」との対比の度合いを弱め、一時的に差異を忘 れさせ、「私」との同一化を誘いやすい、とも考えら れる。場合によっては、読者を「私になった積り」に させる力を持つかもしれない。例えば、「違和感を覚 える」、「私は違和感を覚える」、「筆者は違和感を覚え る」、「あなたは違和感を覚える」、「その人は違和感を 覚える」、などは、読み手をその「違和感」への「共 感」に誘う力が異なるように感じられる。もっとも、

そうは言っても、それは読み手の読み方によることは、言うまでも無い。文芸学者・西郷竹彦に、「側に立つ、寄り添う、身に成る」という三つの読み方を区別するための言葉がある。読み手が「視点人物」に対してどのような「共感的」立場に立つかによる区別である。ほかならぬ「読み手」こそが決定的なのだ。熟達した「読み手」なら、「書き手」が「筆者」と書こうが「私」と書こうが、三つの読み方を自由自在に駆使することだろう。読むことで実生活の実体験に近い経験へと誘おうとするような文学作品の場合には、読み手は、読み進むにつれて、主人公(視点人物)と一体化し「その身に成って、はらはら、どきどき」する、ということが起こる。

冷静で、「客観的で」「科学的な」心理学論文の場合、 例えば、実験室実験による心理学論文では、客観的な 科学者としての筆者は、「筆者」と書くのが相応しい だろう。では、心理臨床実践者が、来談者との対話から得られた微妙な臨床的洞察を書く報告論文の場合はどうだろうか。心理臨床実践者としての立場にあくまで留まりながらも、生身の自らを関わらせて獲得した洞察をいま書いているのだ、という思いが強くなれば、「筆者は」では物足りなくなり、「俺は」とか「僕は」とは書かないまでも、「私は」とは書きたくなる場合も起こるだろう。客観的自然科学的心理学の場合と、実践的人間科学的心理学の場合では、事情が異なる可能性が示唆されている。

おや、心積もりの十数枚を、既に超過してしまった ようだ。この辺で止めるのが適切かなと思う。では、 その「思う」のは誰か?「筆者が思う」のか、「私が 思う」のか。実は「僕が思う」だ。いやいや、ただ「思 う」だけなのだ。